HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	私達が“取り戻すべきもの”
Author(s)	濱田, 康行
Description	『信用組合』第52巻第6号の巻頭言。著者のウェブサイトでも公開されている。 http://www.econ.hokudai.ac.jp/%7Ehamada/articles.html
Citation	信用組合, 52(6), 2-3
Issue Date	2005-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/666
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	article
File Information	hamada_shinkumi_52(6)_2-3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

私達が“取り戻すべきもの”

〈結婚式〉

東欧のある国で結婚式に出席することになった。最初のセレモニーは花婿さんの自宅で行われた。大きな庭にこぎれいな洒落た型のテントを張り、そこに立会人と役人が座る。その前で両人が署名して役所に提出する書類を作る。ここまでは宗教色がないのでシビル・ウェディングと呼ぶ。その後に村の協会へ。神父さんの仕切りで進むところは日本にもある風景だが、にわかクリスチャンが多い日本のそれとはやはり雰囲気が違う。言葉の壁があって正確には伝わらないが、厳かな中に“祝福”の暖かさが伝わってきた。さすがローマ法王を輩出した国である。

結婚式はこれで終わりではない。この国では、家族、親戚、友人が徹底的に楽しむ、それが結婚式。だから、夕方になるのを待ってホテルへ移動、友人もここから参加して日本流の一大披露宴になる。違いは、仲介人なし、時間制限なし。私は、長旅（日本からの直行便がない）の疲れで途中退場になったが、パーティは深夜まで続いたらしい。歌あり、ダンスあり、シャンパンとワインは無尽蔵に出てくる。翌日の午後は自宅に近所の人も集まってガーデンパーティ。あいにく小雨模様で室内になったが、新緑の美しい自然の庭を見ながらの和やかなひと時であった。

結婚式は二人だけのものではなく家族・親類の一大行事という日本では廃れてしまった常識がこの国ではしっかりと維持されていた。それを示す象徴的な出来事があった。シビル・ウエディングに際してお役人が最後にひとつの質問をする。“生まれてくる子供の姓をどうするか”、つまり子供がどちらの家の後継者となるかという重大問題を役人立会いで決め書類に残しておくのである。結婚は愛の帰結でもあり、また家族の起源でもある。

〈自由の代償〉

経済史の研究は、家族の起源が農業にあることを教えている。共同作業が必要だからである。個人は独立した存在ではなく家族の、そして共同体の一部でしかなかった。個人を作り出したのは資本主義の功績である。人間は生まれながらに独立した人格を持ち自由であるという思想が資本主義の土台である。これで初めて適材適所に人材を配置できるし、身分を越えて優秀な人を登用できるからだ。

しかし資本主義になって失ったものもある。それは人々の間の絆である。まずコミュニティが緩み、それが家族に及び、ついに核家族が誕生する。人々は

自由になった分だけ孤立する。東欧の結婚式が見せてくれたのは、ここでは資本主義の分解作用が日本ほどに進んでいないということだった。そして、ここが肝心なのだが、日本人の私にはそれが羨ましく見えたのである。人々は家族の一員で、多勢の親類に囲まれている。ついでに言えば、一大家族が集まれる家がある。近所づきあいも当然あるし、街に行けば教会という場所で精神的につながっている。老後の心配はこの国では経済大国の日本よりはるかに小さい。

かくいう東欧の国々も資本主義に向って歩み始めた。緑地の多い首都の町を歩くと外国製のクルマ、日本やアメリカ企業の大きな看板が目に付く。マーケットに行けば中国・韓国製品がいっぱいだ。しかし、どうみても、この国が日本のようになるとは思えなかった。古き良きヨーロッパが人々の心の底に河となって流れているようだ。

〈ヨーロッパの安定〉

この国に限らずヨーロッパの小さな街に行って驚くのは商店街が健在なことだ。それは街の経済的な象徴だ。教会が精神であるとすれば、商店街は肉体だ。対象的に日本の地方都市の商店街は死滅しつつある。ヨーロッパでも超大型の郊外店は多い。ドイツのアウトバーンからウォルマートの看板が見えたぐらいだが、それでも商店街が駆逐されていないのは、コミュニティが健在で、手をつないで買い物に出かける家族がいるからだ。一国を見ただけのまさに管見に過ぎないが、そこには過ぎ去った昔にあった暖かい光景が見えた。

アメリカ型の自由主義にはヨーロッパの伝統を主張し、ソ連型の社会主義にはユーロコミュニズムの独自性で対抗する。そういえば、社会主義の崩壊は東欧から始まった。このヨーロッパのしたたかさは、やはりヨーロッパの文化から発していると思われる。それは資本主義を受容しながらも人々の間の絆を守り共同体を維持しようとする知恵である。

〈取り戻すべきもの〉

ヨーロッパでは経済活動は社会の上に展開している。経済的に少し具合が悪くなっても社会が維持されているから大きな動揺はない。日本は経済至上主義だったから不況への抵抗力もなかった。バブルの崩壊後の長引く自信喪失状況は日本の構造的弱さを象徴している。

何か取り戻すべきものがある。東欧の国への短い旅でそう思った。協同組合は人々の絆を持って成立し、その上で様々な事業を行っている。つまり文化と社会の土台の上に“事業”があるのだから、“取り戻すべきもの”の近くにいるはずである。日本のあるべき姿を協同組織の側から示す時が来ているように思われる。